論文
常民文化研究　第二巻（二〇二三）

竈神の神像からみるベトナム・フエ地域の特徴
——神像生産者への聞き取りを中心に——

鍋田　尚子

【要旨】

ベトナム・フエ地域の竈神の祭壇で祀られる小型の土製の神像は、陰暦一二月二三日に家で竈神の儀礼をしたあと木の根本などに置かれ、再度見送り儀礼が行われる。この竈神の神像はフエ地域で創造されたものである。

本稿では、現在ディアリン村で神像の手工業生産を続ける六家族と伝統的窯業の村フォックティック村での二〇一二年から二〇二一年までの聞き取りを中心に「モノ」の視点から神像の生産の実態とその変遷を明らかにする。そして、小型の神像を祀ることについてフエ地域の人びとのくらしや歴史的背景から考察する。

現在、ディアリン村で生産されている神像は三種類：実際に調理に使用することもできる土製支脚オンタオ・ロン、その土製支脚をかたどった小型の神像オンタオ・クアン、竈神三柱をかたどった小型の神像はオンタオ・グオイである。土製支脚をかたどったオンタオ・クアンは、もともとフォックティック村で作られていたことが明らかになった。ディアリン村では六〇年ほど前に生産が始まり、そのなかでいくつかの改良がされ、また新たな神像オンタオ・グオイが作られた。フエ地域で広く小型の神像を祀るようになるのは比較的新しく一九八〇年代後半からであり、そこには台所の形態の変化が関わっている。

そして、小型の神像は祭壇で祀るだけではない重要な役割がある。かつて北部地域でも行われていた竈神の見送り儀礼は、実用品であった土製支脚から小型の神像に変えて続けられている。そこにはフエ地域の歴史的背景とそこにくらす人びとの竈神への願いが込められている。神体として祀られる神像を「モノ」の視点からみれば、土製支脚から小型の神像は、物理的な機能を伴うものから象徴的な機能への移行とみることができる。

生産者への聞き取りから神像の生産の厳しい現状や神像に対する思いなどについても述べていく。

キーワード
ベトナム、フエ地域、竈神、神像、「モノ」の視点

はじめに
一　フエ地域の竈神
　1　現在のフエ地域の竈神の儀礼
　2　市場などで売られる神像
二　ベトナムの竈神を見送る儀礼の変遷
三　竈神の神像の生産の変遷
　1　ディアリン村の初代生産者
　　(1)　ホアン・ヴァン・チュン氏
　　(2)　ヴォー・ヴァン・ラック氏
　2　ディアリン村で生産されるまで
四　フォックティック村の神像と竈神の神体
　1　土製支脚と神像
　2　台所と竈神の神体
五　現在のディアリン村の神像生産
　1　神像の生産者
　　(1)　ゴー・ドゥク・フン氏とホアン・ティ・トゥ氏
　　(2)　ヴォー・ヴァン家四兄弟
　　(3)　チュォン・ヴァン・ムオイ氏と息子ダット氏
　　(4)　新たなオンタオ神像　オンタオ・グオイの誕生
　2　神像の生産工程
六　生産者と神像生産の実態からみえてくるもの
　1　神像の変遷
　2　原料と価格
七　フエ地域で祀られる小型の神像
おわりに

はじめに

ベトナム・フエ地域で創造された竈神の小型の神像について、生産者への聞き取りを中心にその実態を明らかにし、フエ地域で小型の神像を祀ることについて考えたい。

ベトナムの多数民族であるキン族の人びとにとって、竈神は今でも家族を守護する最も重要な神であり、毎年陰暦一二月二三日に竈神を天に見送る儀礼が各家で行われている。オンタオと呼ばれるこの竈神は女神一柱（中央）男神二柱（両側）の三柱からなり、毎年大晦日には竈神が登場する喜劇が全国放映されるほど知名度の高い神である。ベトナム・キン族のあいだでは三柱のオンタオを祀ることは共通しているが、祀り方や竈神の神体は地域により異なる。

フエ地域では、竈神の祭壇に小型の土製の神像が置かれている（写真1）。非常に一般的な光景だが、フエ地域とその周辺地域以外でこの神像をみることはほとんどない。現在、この土製の神像はディアリン村の六家族により手作業で生産されている。しかし近年、神像の生産は非常に厳しくなっている。

この竈神の神像は、インターネットやベトナムのニュースなどで取り上げられることはあるものの、管見の限り研究としては、考古学者西村昌也によるディアリン村の土器生産業の報告のなかで、竈神をかたどった土製品の生産について言及されているのみである［西村 2012b］。

写真１　竈神の祭壇

筆者は以前、物質文化研究の視点からディアリン村の神像の生産と道具について、「物」を中心に述べた[1]。本稿では二〇一二年から二〇二一年初めまで行なってきた生産者への聞き取りを中心に、フォックティック村での調査や新たに明らかになったことを加え、民具研究の「モノ」の視点から生産者と神像生産の実態と変遷を明らかにする。そしてなぜフエ地域の人びとが小型の神像を祀るのか、台所の変遷と人びとのくらし、フエ地域の歴史的背景などから考察する。

佐野賢治は民具を「モノ」としてみる視点の重要性について、考古学が扱ってきた有形の「物」と民俗学が対象としてきた精神文化、無形・不可視的な「もの」を併せてみることにより両

全の形〝モノ〟となり、その存在の全体像が初めて摑めることになると述べている［佐野 2002 : 3–4］。そのことに従って本稿では全体的な視点として「モノ」の視点からフエ地域の竈神の神像をみていきたい。

一　フエ地域の竈神

フエ地域の竈神について、フエの民間信仰の研究者チャン・ダイ・ヴィンは以下のように記している。

> 陰暦一二月二三日、家で竈神の儀礼をしたあと、再び大きな木の根本や地区の廟の片隅に竈神を納めて見送る儀礼をしなければならない［Trần Đại Vinh 1995 : 85］。

1　現在のフエ地域の竈神の儀礼

多くの家族は陰暦一二月二三日〇時、日付が変わるとすぐに家の台所で竈神を天に送る儀礼をする。一年間祀られていた竈神の神像と版画、また供物を祭壇から下ろし、新しい神像と版画、花や水、おこわ、果物（フエではバナナが多い）などを供え、祈願文を読み上げる。

そのあと、祭壇から下ろした古い神像を大きな木の下や地域の廟などに持っていき、竈神の版画と紙の服、紙銭などを燃やして神像を見送る儀礼をする（写真２）。見送りされた小型の神像に混じって土製支脚[2]が置かれていることがある。そこには煤などの付着がないため、実際に調理に使用していたものではなく、神体として祀っていたものであることがわかる。この新旧交代の儀礼は現在、フエ地域とその周辺地域で行われている。

2　市場などで売られる神像

陰暦一二月、フエ市で最も大きく伝統のあるドンバー市場には竈神の神像が山積みにされて売られている。そして儀礼の日が近づいてくると市場だけでなく小さな商店や道沿いなど、いたるところで竈神の神像が売られるようになる。

写真２　見送りされた竈神

神像だけで売られる場合もあるが、近年は神像と竈神の版画一枚とアオビンと呼ばれる竈神の服三枚が一セットになったものが多く売られている。この版画とアオビンも全てフエ地域で生産されたもの

である。また、女性の竈神のために小さな鏡や櫛、香水瓶なども売られており、それらを一緒に購入していく人もいる。北部地域の竈神の儀礼で使用する立体的で大きな紙製の冠や靴なども売られてはいるが、購入する人は少ない。また、非常にわずかだが実用品としても使用できる三つの土製支脚も市場で売られている。

二　ベトナムの竈神を見送る儀礼の変遷

竈神の新旧交代は、フエ地域で現在も一般的に行われている。ここではベトナム全土の竈神の新旧交代儀礼について述べたい。

一九〇八年にドアン・チエンが記した『安南風俗冊』の元旦の項に、“棄前灶于浄處、易以新灶”(3)とある［Đoàn Triên 1908：16, 117, Hình 1b］。古い土製支脚を清潔な場所に捨て、新しい土製支脚に変えることが、元旦を迎える前の年末の儀礼として記されている。『安南風俗冊』と同時期、北部地域の人びとの生活・生活技術を調査したフランス人アンリ・オジェが編纂した版画に見送り儀礼の様子が描かれている［Oger 2009（1909）］。（図1）「オンタオ（竈神）を祀る」と書かれたその版画には、木の下に土製支脚や土製の焜炉などが置かれており、女性が木の根本に土製の焜炉を置く様子が描かれている。その版画のなかに書かれた喃字（チューノム）（漢字を改良してつくったベトナム固有の文字）の意味は「竈王の交換」である。

図1　オンタオ（竈神）を祀る
出典 Oger 2009（1909）

二〇世紀中頃、フランス語とベトナム語で書かれた雑誌『ベトナム民』にH. V. V.(4)が寄せた「オンタオを祀る―陰暦一二月二三日―」には、年末に人びとは古い竈神をきれいな池や湖に捨てると記されている［H. V. V. 1948：37-38］。ドアン・チエンやオジェ、またH. V. V.の記述は北部地域の竈神についての内容である。

フエ地域では、フランス人研究者カディエールが一九一八年

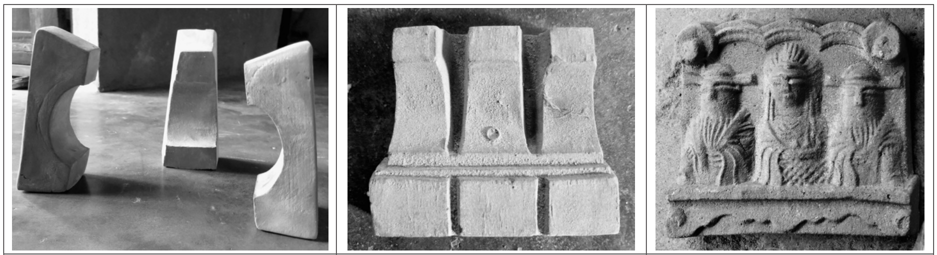
に、木の下に鍋の台（土製支脚）(5)が置かれていることを報告している［Cadière 2015 tap2：14］。

これらの資料から二〇世紀半ばまでフエ地域だけでなく北部地域でも竈神の新旧の取り替えが行われていたことは明らかである。実際の聞き取りでも土製支脚を使用していたころは古い土製支脚を池などに捨てていたと話す北部地域の人たちがおり、中部地域や南部地域でも古い竈神（土製支脚）を木の根本に置いていた人たちがいる。しかし現在、北部地域の竈神は祖先の祭壇で他の神と一緒に一つの香炉「神霊」で祀られており、新旧を取り替える竈神としての「モノ」はない。そして中部地域や南部地域では一般的に「定福灶君」と書かれた牌位が竈神の神体として祀られ、毎年新しくすることはない(6)。

他の地域で行われなくなった竈神の新旧交代の儀礼はフエ地域で現在も続けられている。しかし、それは新しく小型の神像を創造して儀礼が継続されているのである。次はフエ地域の神像とその生産をみていきたい。

三　竈神の神像の生産の変遷

現在、フエ地域の家庭で祀られている神像は三種類である（図2）。実際に調理に使用することもできる土製支脚は、神像を生産する人びとのあいだでは大きいオンタオ（竈神）という意味でオンタオ・ロン（Ông Táo Lớn）と呼ばれている。その土製支脚をかたどった小型の神像は、オンタオ・クアン（Ông Táo Quân）、竈神三柱をかたどった人格化された神像は、オンタオ・グオイ（Ông Táo Người）と呼ばれる。オンタオ・ロンは素焼きのみだが、オンタオ・クアンは素焼きと漆が塗られた二種類があり、オンタオ・グオイは素焼き、漆、カラフルな色付けがされた三種類がある。



オンタオ・ロン（Ông Táo Lớn） 実用品も兼ねた土製支脚 【大きいオンタオ】	オンタオ・クアン（Ông Táo Quân） 【翁灶君】	オンタオ・グオイ（Ông Táo Người） 【人（型）のオンタオ】

図2　竈神の神像　3種類

1　ディアリン村の初代生産者

竈神の神像は現在、ディアリン村に住む六家族が生産している。詳しくは後述するが

彼らはみな二代目の世代である。ディアリン村で最初に竈神の神像を作り始めたのは以下の二人である。

(1)　ホアン・ヴァン・チュン氏

二〇一六年の聞き取りによると、五〇～六〇年ほど前に今まで手で捏ねて作っていた実用品としての土製支脚を型で作るようになり、同時に土製支脚をかたどった神像オンタオ・クアンの生産も始めたという。チュン氏には四人の息子がおり、以前は竈神の神像を作っていたが、現在は別の仕事をしている。娘のホアン・ティ・トゥ氏がいとこのゴー・ドック・フン氏とともに神像の生産を続けている。チュン氏が土製支脚を型で作る以前、人びとは各家で自分たちの手で粘土を捏ねて作っていたという。

(2)　ヴォー・ヴァン・ラック氏

後述するヴォー・ヴァン家四兄弟の父である。二〇一四年の聞き取りによると、以前はディアリン村でレンガの製造をしていたが、六〇年ほど前に竈神の神像を作り始めたという。きっかけは、シン村の人が作った神像を市場でみて、レンガ製造の技術を応用して作れるかもしれないと考えたことであった。最初は購入した神像を真似て自分で作り始め、その後シン村に作り方を聞きに行ったこともあるという。

2　ディアリン村で生産されるまで

現在、ディアリン村で生産されている神像は、そのもとを辿っていくとフエ市の中心から北西約三〇㎞に位置する伝統的な窯業村、フォックティック村で最初に作られたことが明らかになった。フォックティック村の竈神と神像についての詳細は後述するが、ここで当時作られていたのは実用品としての土製支脚と小型の神像オンタオ・クアンの二種類であった。

ディアリン村の初代生産者ヴォー・ヴァン・ラック氏が市場でみたという神像は、現在シン村に住むグエン・ヴァン・ロイ氏(以下ロイ氏と記す)、四二歳(二〇一三年当時)の祖父と両親が作っていたものである。ロイ氏の祖先の出身はフォックティック村の隣村ウーディエム村である。

ロイ氏一家は一時期仕事でラオスに行っていたが一九四五年にベトナムに戻り、その後シン村に住み始めたという。シン村は農村である。しかしロイ氏の家は水田を持っておらず、またシン村の伝統的手工芸である版画生産にも携わっていない。おそらく、フォックティック村で生産していた小型の神像などを真似て土製品を生産することをシン村での仕事としたのであろう。ロイ氏の家では木の型を用いず、土製品をもとにセメント

の型を作り、そのセメント型を用いて神像や土製品を生産していた。

祖父や両親は土製支脚とオンタオ・クアンの二種類を生産し、両親の仕事を引き継いだロイ氏は二〇〇一年まで土製品や竈神の神像を作っていた。そして最後の何年間か新たに竈神三柱をかたどった神像オンタオ・グオイを作っていたという。また、ロイ氏が子どものころ、祖父と両親のところにディアリン村の人が神像の作り方を聞きに来ていたのを覚えているという。

四　フォックティック村の神像と竈神の神体

1　土製支脚と神像

フエ市の中心地から北西へ約三〇km、クアンチ省に隣接するフォックティック村は、一七世紀以前から焼締陶器を中心とした窯業生産が行われていた伝統的な村である。Ω状に湾曲したオラウ川に囲まれた村に田んぼはない。村の人たちによると[7]、土製支脚を調理に使用していた頃はそれぞれの家で土を捏ねて手で成形し、村の共同の窯で一緒に焼いていたという。しかし次第に土製支脚を使用する家が少なくなると、各家で作ることはなくなり、最後はホー・ヴァン・ナイ氏が一人で作っていたという。

村長のホアン・タン・ミン氏（以下ミン氏と記す）、六六歳（二〇二〇年当時）によると、村ではミン氏の父親を含めた四人が型を用いた土製支脚と竈神の神像の生産を専業としていた。ミン氏の祖先はもともと陶器を作っていたが、父親の代から土製支脚と神像だけを作るようになり、その当時は七月に成形をして、日差しの強い七月と八月に屋外で乾燥させ、一一月に焼成し、そしてフォックティック村の近くの市場に売りに行っていた。ミン氏の父親は二〇〇〇年に亡くなり、その前年一九九九年まで生産を続けていたという。フォックティック村では、

写真３　フォックティック村で作られた神像

ホー・ヴァン・ナイ氏が二〇一一年に亡くなると土製支脚と神像の生産に携わる人はいなくなった。

その当時、フォクティック村で作られていた神像は、土製支脚をかたどったオンタオ・クアンであった。ミン氏によると、そのオンタオ・クアンの特徴は土製支脚をかたどった三本のあいだに切れ目があり、真ん中にはヘソがつけられていたという。現在、神像も型も残っていない。しかし、村のカイティ廟の中にある木の根本に見送りされた神像が残されていた。ミン氏に確認してもらうとホー・ヴァン・ナイ氏やミン氏の父親が作っていたものと同じであるという（写真3）。

2　台所と竈神の神体

ここでフォックティック村の台所の変遷と竈神の神体について少し記しておきたい。家により差はあるが多くの村の人たちが土製支脚を調理に使用していたのは、一九五〇年～一九八〇年頃までである。煮炊きの中心が土製支脚から土製の焜炉や五徳に移り、ガスコンロが使用されるようになったのは、早い家では一九八〇年初め頃である。現在もガスコンロを使用していない家はあるが、年々少なくなっている。

台所の形態は、もともと地炉(8)に土製支脚が置かれていたが、地炉から台付きの炉になり、そこで五徳や土製の焜炉を使用してきた家も多い。その台付きの炉は立って使う台となり、ガスコンロが置かれるようになるが、現在でもガスコンロを用いず、台付きの炉に五徳を置いて調理をしている家もある。また、ガスコンロを設置したあとで新たに地炉や台付きの炉を作り、そこに五徳を置いている家もある。台所の形態と変化はフエの他の地域と大きな違いはない。

写真４　昔の炉と竈神
フォックティック村博物館

しかし、台所で祀られてきた竈神は、フォックティック村の人たちの話では昔から小型の神像であった。自分の敷地に博物館を作ったレ・チョン・ジエン氏、六八歳（二〇一四年当時）によると、村の人たちは土製支脚を煮炊きに使用していたときも小さい竈神オンタオ・クアンだけを祀り、土製支脚は敬っていたけど竈神として祀ってはいなかったという（写真4）。

いつ頃からオンタオ・クアンが作られ、祀られるようになっ

たのか、はっきりした年代はわからない。しかし、二〇一五年に七〇〜八〇歳代の村の人たちに話を聞いたとき、子どもの頃に土製支脚を使用していても小型の神像が祀られていたと語っている。

五　現在のディアリン村の神像生産

ディアリン村はフォオンチャー県フォオンヴィン社に属し、ナムホア、ドンタイン、ゴアトゥオンの三つの集落からなる。フォオンヴィン社は、南をフエ都城に接し、東はフオン河（香江）が流れる。ディアリンの名前は、フエ地域の地誌『烏州近録』に「地霊」として登場しており、一六世紀には成立していた村である。

現在、フエ地域の人びとが祀る竈神の神像はディアリン村のゴアトゥオン集落とナムホア集落に住む六家族が生産している。

1　神像の生産者

(1)　ゴー・ドゥック・フン氏とホアン・ティ・トゥ氏

ゴー・ドゥック・フン氏（以下フン氏と記す）は五三歳（二〇一六年当時）男性、ゴアトゥオン集落でいとこのホアン・ティ・トゥ氏（以下トゥ氏と記す）と土器の生産をしている。祖先はクアンビン省の出身である。

フン氏の家では竈神の神像だけではなく、棺桶の中に入れる五穀壺[9]や死者の頭を固定する土枕なども生産している[10]。両親は土器の生産はしておらず、叔母（母親の妹）から仕事を受け継いだ。この叔母はトゥ氏の母親であり、トゥ氏の父親はディアリン村で最初に竈神の神像を作り始めた一人、ホアン・ヴァン・チュン氏である。

・竈神の神像の生産

フン氏は三十数年前（二〇二〇年時点）に竈神の神像を作り始め、当初は実用品も兼ねた土製支脚のオンタオ・ロンとオンタオ・クアンの二種類を作っていた。現在はオンタオ・グオイも合わせて三種類の神像を作っているが、素地作りから成形、焼成までを行い、色付けはせず、素焼きのまま買取りの業者などに渡している。トゥ氏と二人で作業をしているため、色付けまではできないという。基本的に作業はトゥ氏が素地作りを担当し、フン氏が成形から焼成までをしている。

叔母から仕事を受け継いだ頃は、オンタオ・ロンとオンタオ・クアンの二種類の神像を同じ割合で生産していたという。しかし次第にオンタオ・クアンを多く作るようになっていった。調理道具として土製支脚の使用が減っていったことと、土製支

脚を実用品として使用していても祭壇にオンタオ・クアンの神像を祀る人が増えていったからである。フン氏は小さい方が祀るのに便利だったからだろうという。だが、現在も竈神は実際に煮炊きに使用してきたオンタオ・ロンだと考えている人たちがいるため生産は続けている。しかし、年々オンタオ・ロンの需要は減り、二〇一九年頃から注文を受けて作るようになった。現在、人気の神像はオンタオ・グオイであり、三種類の神像のなかでもっとも多く生産している。

フン氏とトゥ氏はよりきれいで壊れにくい竈神の神像を作るために、日々、丁寧な作業を続けている。なかでも最初の素地作りは重要である。石などの夾雑物を丹念に取り除き、ネーサットと呼ばれる針金を張りつけた糸鋸で何度も土を薄く切り、水を加え足や手でしっかりと捏ねる。重労働で大変な作業ではあるが、それにより焼成後に明らかな違いがでて、壊れにくく触った感覚もなめらかになるのだという。割れてしまった神像をみせながら、粘土に多くの夾雑物が残っているから、と説明してくれた。それは明らかにディアリン村の生産者以外の人が作った神像である。フン氏は他の人が作った神像を市場などでみつけては購入して、自分の作る神像と比べて研究をしている（写真5）。

写真5　フン氏の作業風景

・原料

二〇一二年の報告では、昔はディアリン村の飛び地近くで土を採取していたが、現在土の採取が禁止されており、水田の下の土である象牙色の粘土、黄色粘土を買っているとあるが［西村 2012b：284］、現在は水田の土の購入も難しく、山の土を購入している。

・神像の特徴

フン氏が初期に作っていたオンタオ・クアンの神像は、フォックティック村の神像と同じく土製支脚をかたどって上の部分が分かれたものであった。その神像は土製支脚の部分が壊れやすかったという。そのため試行錯誤を重ね裏側を一枚で繋げ、表面の部分だけで三本の土製支脚を表現する方法を考えた。現在のかたちにするまでに時間がかかったが、それにより壊れに

くくなったという。今では他の生産者も裏側が一枚に繋がったフン氏と同様の神像を生産している（図2オンタオ・クアンを参照）。

また、フン氏のオンタオ・クアンは真ん中の女性の部分にヘソが作られている。フォックティック村の神像のヘソとは違い、型にヘソとなる部分が彫られているため、神像のヘソはデベソのように外側に飛び出ている。これはフン氏の神像独自のものであり、市場などでみかけた折にもすぐにフン氏の神像と見分けることができる。

・神像の型

オンタオ・クアンの型は、最初はホアン・ヴァン・チュン氏が使用していた型と同じものを使っていたが、前述したようにその後自分で改良を加えている。

現在、フン氏は神像の型をオンタオ・ロン一つ、オンタオ・クアン五つ、オンタオ・グオイ五つ、所有している。型は必要なときに取り出して使用するため、捨てずに屋根裏に置いて残している。最も古い型は約一五年間使用してきたという。

型作りは彫刻師に依頼し、費用は型の原料と彫刻を合わせて三〇万ドン（約一五〇〇円）[11]である。神像の型の原料は最も堅いリムの木（gỗ lim）と呼ばれる鉄木がいいが、そのときにより変わるという。現在使用しているオンタオ・クアンの型はゾイの木（gỗ dồi（dổi または giổi））、日本名はタラウマ、幹が堅牢な木質でベトナムでは建材として用いられる木材である。オンタオ・グオイの型はフォンの木（gỗ hương）、日本名は本花梨またはパドック（Padoauk, 学名 Pterocarpus macrocarpus）、マメ科の広葉樹で重くて堅い木質が特徴である。

できあがった型に、フン氏は自分で工夫して手を加えている。現在使用しているオンタオ・クアンとグオイの型はともに両側に金属の棒を自分ではめ込んでいる。成形のとき、型に入れた粘土を糸鋸で削る際に滑りがよくなり、素早くスムーズな動作

写真６　フン氏の型　ヘソが彫られ、金属が入っている

ができるのだという。また、三柱をかたどったオンタオ・グオイの型は顔の表情、特に鼻をきれいに残すための細かい調整も自分でしている。フン氏の神像の型は、オンタオ・クアンだけでなくオンタオ・グオイにもヘソが作られている（写真6）。

・神像の価格

素焼きの竈神の神像は、二〇一三年は卸値で一個三〇〇ドン（約一円五〇銭）、二〇一四年は五〇〇ドン（約二円五〇銭）。二〇二〇年まで毎年継続的に価格を調査しているが、三〇〇ドンから五〇〇ドンの間を行ったり来たりしている。この卸値を決めるのは自分であり、健全な価格競争によるものだとフン氏はいう。しかし、フン氏が素焼きの神像を五〇〇ドンで卸すのに対し、近所の人がその神像を買い取り色付けしたものが市場では一個五〇〇〇ドン（約二五円）で売られているという。自分たちは大変な思いをして作っているが儲からなく、色付けする人や市場の人たちがより多く儲けていると話したことがある。神像の生産工程は、原料の購入、素地作りから焼成まで大変な作業である。

二〇二〇年一〇月フエ地域は大雨と洪水で大きな被害をうけた。神像の生産にも影響し、生産量が少なく、それにより卸値価格は上がったという。周りでは素焼きの神像は一個二〇〇ドンほど高く取引していたというが、フン氏は前年と同じく五〇〇ドンだった。

・流通

神像の多くはドンバー市場で売られているようだという。というのも、焼成のあと他の人に渡すので詳しい流通はわからないのである。フエ地域以外にクアンナム省ダナンやホイアン、クアンチ省からも人が買い付けに来る。しかし、その場合は箱詰めするための箱やテープ等はフン氏の実費となり、それを差し引くと利益は非常に少ないという。

フン氏の祖先の出身地であるクアンビン省でも竈神の神像は流通しており、オンタオ・ロンと小型の神像の二つを祀っているという。

・箱型レンガ窯

敷地に建てられた小屋の中に焼成のためのレンガ窯が作られている。箱型で大きさは、一二〇㎝幅×一二三㎝奥行き×九一㎝高さである。竈神の神像以外に五穀壷などを生産しているため、窯を解体することはない。

・竈神の祭壇

竈神の祭壇は台所のガスコンロの置かれた壁の上部に作られ、そこに香炉とオンタオ・グオイの神像と版画、水が置かれている。非常にシンプルである。新しい年を迎え、神像の生産を始めるときには自分の家の竈神に祈願をする。

年末、竈神の儀礼に合わせた神像の生産が終わると、竈神の神像作りは少し休みに入る。一年間使用してきたオンタオ・クアンとオンタオ・グオイの二つの型はきれいに掃除し、年末からテトにかけて竈神の祭壇に置かれる。フン氏によると神聖なものとして祀っているわけではなく、壊れたり汚れたりしない場所として置いているだけだという。

・竈神の神像にまつわる話

台所は清潔にして、竈神を祀る場所もきれいにしておかなければならない。もし清潔が保てないと家族の人たちが病気になり、また、竈神の神像を鶏が倒すと子どもが病気になる。もし子どもが目の病気や涙が非常に出る場合は、竈神の神像を削って目につけると治るという。

(2)　ヴォー・ヴァン家四兄弟

ヴォー・ヴァン・ラック氏の四人の息子は、ナムホア集落でそれぞれ家庭を持ち、家族単位で神像を生産している。ヴォー・ヴァン家が所有する家譜情報から初代は今からおよそ一〇〇年前に、ビンディン省からフエへ移住してきたことがわかるが、そこに職業についての記載はない。

父ヴォー・ヴァン・ラック氏の時代には集落内で神像を生産していた人たちが何人かいたというが、現在ナムホア集落では四兄弟のみが生産を続けている。

①長男ヴォー・ヴァン・ドック氏

四兄弟の長男ドック氏は六二歳（二〇一六年当時）、妻と三人の息子がいる。ドック氏の家は、両親の家の前、道を挟んで向かい側に建てられている。現在、息子たちは結婚してそれぞれ仕事をしており、神像生産を引き継いでいる人はいない。主に妻と二人で作業をしているが、同居している三男夫婦が繁忙期に夫婦で手伝っている。

・神像の生産

現在、三種類の神像を生産しているが、最も多いのはオンタオ・グオイの神像である。一日に約六〇〇個を成形する。ドック氏が成形をし、焼成は夫婦で行う。焼成のため窯の中に乾燥させた竈神の神像と籾殻を交互に配置する。火が均等にまわる

ように神像の間に粘土のかけらをはめ込み、水平にしてバランスを整えながら積み上げる。細かな作業だが、その違いは焼成後にあらわれるという。二〇一五年は窯の中に八列一二層積み上げていた。

色付けや袋詰めなどは妻と三男夫婦も手伝っている。ここ最近は今までのオンタオ・クアンより二回りほど大きいものも作っている。

二〇二〇年の大雨と洪水では家の中にも水が入り、窯や作業途中の神像の多くが水に浸かり、窯での焼成もできず、神像のほとんどが商品にならなくなってしまった。一見すると今までのものと変わりない焼成後の神像も多くあったが、ドック氏夫婦は水に浸かってしまったから商品として出せないと廃棄していた。例年は一年間で約七万個生産しているが、この年は三万個と半分以下であった。

・神像の価格

色付けしたオンタオ・グオイに竈神の版画などを袋に入れたセット一つが一五〇〇～二〇〇〇ドン（約七円五〇銭～一〇円）、漆を塗ったオンタオ・クアン一〇〇セット一箱が一〇万ドン（約五〇〇円）である。二〇二〇年は生産量が少なかったため、価格が上がり、一〇〇セット一箱が二〇万ドン（約一〇〇〇円）であった。

神像のセットに入れる竈神の版画やアオビンと呼ばれる竈神の服、それらを入れるビニールの袋は自分たちで市場などで購入している。

・神像の型

ドック氏の三男は彫刻の仕事をしており、ドック氏が使用する竈神の神像の型を製作している。息子が神像の型を作る以前は村の彫刻師に依頼し、そのときは一つの型の価格は二〇万ドン（約一〇〇〇円）であった。

・箱型レンガ窯の解体と組み立て

焼成のためのレンガ窯は家の中、壁の三方がほぼあけ放された空間に作られている。ドック氏の家は、竈神の神像のみを生産しており、竈神の儀礼が過ぎるとしばらく焼成はしないため、毎年窯を解体する。そして、陰暦三月になると夫婦二人でレンガを積み上げて窯を組み立てる。組み立ては一日で完成するが、その年によって多少大きさが変わるという。二〇一五年の窯の大きさは約一二〇cm幅×一〇〇cm奥×一〇〇cm高さである。

・原料

原料の粘土の質は神像作りに重要である。しかし原料の価格が毎年上がり、それが最も心配なことだという。陰暦二〇二〇年一二月の年末、翌年一年分の土を購入した。土はトラックで運ばれ、一台分が土四塊、一〇〇万ドン（約五〇〇〇円）、ドック氏は三トラック分の土を購入した。

・竈神の祭壇

竈神の祭壇には、オンタオ・クアンの素焼きの神像が祀られている。一番大切な神像は土製支脚であるオンタオ・ロンである。そのため、それをかたどったオンタオ・クアンを祀っているという。

②次男ヴォー・ヴァン・ズック氏

ズック氏は六〇歳（二〇一六年当時）、妻と子ども二人（息子と娘）がいる。子どもたちは結婚してそれぞれ子どもがいる。両親の家の後ろにズック氏の家は建てられている。

・神像の生産とレンガ窯

竈神儀礼の少し前の繁忙期には、息子とその嫁、結婚して近くに住む娘も戻ってきて家族総出で作業をする。ズック氏の長男が型入れを担当し、一日に約七〇〇個を成形する。ズック氏の仕事は神像の焼成である。レンガ窯は敷地内に置かれ、神像を焼成する前には窯に線香を供え拝礼してから火を入れるという。娘は色付けを担当し、息子の嫁は出来上がった神像をダンボールに詰める作業をする。

ズック氏の家も竈神の神像のみを生産しているため、焼成の期間が終わると窯は解体される。

・竈神の祭壇

ズック氏にとって竈神は実用品として使用してきた土製支脚であり、また自分たちが作る小型の神像も大切であるため、壁の上部に作られた祭壇ではオンタオ・グオイの神像を祀り、地面の上ではオンタオ・ロンを祀っている。

屋内で豚を飼育しており、その飼料を作ったりするために地炉に手作りの竈が作られている。その地炉の脇にオンタオ・ロンは祀られている。現在、オンタオ・ロンは実際の調理に使用していないが、テトや陰暦一日、一四日、三〇日には火を入れてオンタオ・ロンを温めるという。

・神像の生産と迷信異端の禁止

一九七五年ベトナムは南北統一された。それにより、これま

で北部地域の社会政策であった迷信異端に対する厳しい取り締まりが中南部地域でも進められた。シン村の版画業はその対象となり多くの版木が壊された(12)。

竈神の神像生産への影響については、長男ドック氏と次男ズック氏が記憶している。その当時はまだ実用品も兼ねたオンタオ・ロンの生産が多く、それは煮炊きのための道具でもあったため、特に何の支障もなく生産していたという。同時にオンタオ・クアンも生産していたが、それも問題はなかったという。

③三男ヴォー・ヴァン・ハイ氏

ハイ氏は五八歳（二〇一六年当時）、妻と子ども二人（息子と娘）がいる。家は実家の後ろ、次男ズック氏の家の隣に建てられている。

ハイ氏の家も竈神の神像のみを生産しているため、家の中に作られた箱型レンガ窯は、焼成の作業が全て終わると解体される。解体後の場所には、簡易の炉にレンガを積み重ねた竈が作られ、そこで湯を沸かしたりしている。別の場所にガスコンロがあり、その壁の上部に祭壇が作られ、ハイ氏の家で作られた色付けされたオンタオ・グオイが祀られている。

④四男ヴォー・ヴァン・ナム氏

ナム氏は五一歳（二〇一六年当時）、妻と二人の子ども（娘と息子）がいる。四男のナム氏が両親の家を継いでおり、父の代からの焼成用の箱型レンガ窯は道路を挟んで向かい側、長男ドック氏の家の隣にある小屋の中に作られている。

・神像の生産

神像は主に夫婦で生産している。夫婦で素地作りをしているが主に妻が行い、成形はナム氏、繁忙期には息子や娘、その友人が色付け、袋詰めを手伝っている。

神像の他に五穀壺も生産しているため窯を解体することはない。窯の大きさは、約一四五cm幅×一三〇cm奥行き×一〇〇cm高さである（写真7）。

写真７　ナム氏のレンガ窯

・原料

二〇一二年の報告にはディアリン村の飛び地の水田の主から購入、船で行き土を購入して持ち帰るとあるが［西村 2012b：281］、二〇一三年に話を聞いたときには、ディアリン村に原料の粘土を売りにくる人たちがおり、一サオ[13]約一〇〇万ドン（二〇一三年調査時点で約四千円）で水田の土を購入していた。現在は水田の土の購入は難しくなっている。

写真８　ナム氏の竈神

・竈神の祭壇

ナム氏の家の竈神は祭壇にオンタオ・ロンとオンタオ・グオイの二つが祀られている（写真８）。土製支脚であるオンタオ・ロンは竈神として大切であるという。そのため、台所の壁の上部の冷たい場所で祀られる竈神をテトや毎月三〇日、一日、一四日に祭壇から降ろして地面におき、火をつけて温めている。

ナム氏は、竈神を不思議な神だと思うという。きれいにして竈神を祀ることが大切で、もし汚い場所で祀ると子どもが病気になるという。

・神像の流通（四兄弟）

四兄弟は、色付けした神像と竈神の版画などを袋に入れて一つのセットにしたものを段ボールに詰め、自転車に乗せて自分たちでドンバー市場に卸しに行く。主に女性たちの仕事である。そのほかに業者が買い付けにくる。クアンチ省やクアンビン省でも販売され、最近ではハノイやサイゴンまで流通が広がっていると聞くが、自分たちは神像を生産して業者に売るだけで、手元を離れた神像がどこに売られているのかはわからないという。

(3)　チュォン・ヴァン・ムオイ氏と息子ダット氏

チュォン・ヴァン・ムオイ氏（以下ムオイ氏と記す）は七二歳（二〇一五年当時）、妻と二人の息子がいるが息子たちは彫刻を仕事としており、ムオイ氏が一人で、神像の生産をしている。もともと祖先は大工であり、ディアリン村で周りの人が竈神の神像を作るのをみて自分も始めたという。二〇一二年の報告に

は、一九八二年以降に前述したホアン・ヴァン・チュン氏について土器作りを習い作り始めたと記されている［西村　2012b：286］。

・現在の竈神の神像の生産

ムオイ氏の生産する神像は、素焼きのオンタオ・クアンの一種類のみであり、市場では売られていない。ホー・ヴァン・イェム氏（以下イェム氏と記す）の祀る竈神を信仰する人びとのための神像を生産している。イェム氏については後述する。

神像の大きさは、一一・五㎝横×一〇・五㎝縦、他の生産者が作るオンタオ・クアンより大きい（写真9）。神像にはヘソが作られているが、型にはヘソが彫られていない。そのため、成形して型から取り出した後、やわらかいうちに消しゴム付き鉛筆の消しゴムがなくなった後の金具の部分を活用して円形の跡をつける。色付けや漆を塗ることはなく、乾燥させ焼成して完成である（写真10）。

この神像を作るきっかけは、ある日イェム氏がディアリン村にやってきて、土を練っていた面識のないムオイ氏に竈神の神像の型を作るように依頼したという。イェム氏は十数年前に亡くなっている。妻の話によると、イェム氏の身体にある日突然竈神が入ってきて、それ以降イェム氏の家が竈神を祀る中心地となり、イエム氏が祈願した竈神を求めて人びとが訪れるようになったという。フエ市内にあるイエム氏の自宅には大きな竈神の祭壇があり、イェム氏の亡き後は妻が引き継いで竈神への祈願と儀礼を行なっている。西村はイェム氏について風水を得意とすると説明している［西村　2012b：286］。

写真9　ムオイ氏の作る神像

写真10　ムオイ氏の作業風景

そのイェム氏から依頼された型を製作したのは後述する息子のダット氏である。イェム氏が訪ねて以来、ムオイ氏はイェム氏との契約から市場で販売することはなくなり、注文された神像だけを作るようになった。現在のオンタオ・クアンの神像は一九九六年から生産

している。神像は三〇〇〇個で八〇〇万ドン（約四万円）という。

今はイェム氏の妻が毎年六月に必要な個数を注文し、出来上がるとシクロ（人力三輪車）で受け取りにくる。そのときイェム氏の妻は、ムオイ氏の家で受け取った神像に儀式をして、それから持ち帰るが、その儀式が何かムオイ氏にはわからないという。

・箱型レンガ窯

窯は家の建物の中に作られている。大きさは、約一〇七cm幅×一二〇cm奥行き×一二七cm高さである。焼成をするときには窯のレンガとレンガのあいだに線香をさし拝礼してから始める。窯は解体することなく一年中置かれている。

(4) 新たなオンタオ神像　オンタオ・グオイの誕生

ムオイ氏の長男チュォン・ヴァン・ダット氏は四六歳（二〇一六年当時）、隣の村に住み彫刻を仕事としている。神像作りはしていないが、父に頼まれて神像の型を彫っている。

ダット氏によると、イェム氏は一番初め、土製支脚をかたどったオンタオ・クアンの型を依頼した。その後、一九九三年に竈神三柱（中央に女性、両側に男性）をかたどった型を製作して欲しいと依頼があった。その頃は誰も三柱をかたどった神像を作っていなかったため、試行錯誤しながらデザインを考えて型を彫っていたという。出来上がったオンタオ・グオイの型は一九九四〜一九九六年まで使用していた。

しかし、イェム氏が竈神を祀るのはやはり土製支脚をかたどったオンタオ・クアンの神像がいいといったため、少し大きめのオンタオ・クアンの型が作られた。それが現在の型と神像である。その後、ダット氏やムオイ氏はオンタオ・グオイの神像や型を作っていない。ダット氏は最初に作った型を残していないが、親子がオンタオ・グオイの型を使用しなくなった後、ディアリン村の神像生産者のあいだでダット氏の型を真似てオンタオ・グオイの型が作られるようになった。ダット氏によれば、自分が考案したものと同じであるという。それが今の神像オンタオ・グオイの始まりである。

2　神像の生産工程

ベトナムの正月があけて神像を作り始める前には、各生産者は自分の家の竈神の祭壇に供物：花、果物、檳榔、酒などを供えて、これから竈神の神像作りを始めることを報告し拝礼する。焼成の前に、レンガ窯に線香を供えて拝礼し、それから火をつける。最後に神像をすべて作り終えたあとにも、家の竈神の祭

壇に同じように供物を供え、無事に作り終えたことを感謝し挨拶をする。

生産工程は、a）素地作り、b）成形、c）乾燥、d）焼成、e）色付け・袋詰め、全て手作業である。(14)

六　生産者と神像生産の実態からみえてくるもの

ここでは個々の生産者への聞きとりから明らかになった生産者と神像生産の実態について整理していきたい。

1　神像の変遷

・形態の変遷

現在はフエ地域のほとんどの家で祀られている竈神の神像。この小型の神像が最初に作られたのは、フォックティック村である。フォックティック村では実用品として土製支脚と土製支脚をかたどった小型の神像オンタオ・クアンを型作りで生産していた。そして実際に土製支脚を使用して調理をしているときも、オンタオ・クアンが祀られていた。しかし、それはフォックティック村周辺の市場で売られ、まだ広くフエ地域に流通してはいなかった。土製支脚とオンタオ・クアンの生産は、その後シン村のひとつの家族を経て現在のディアリン村での生産へ繋がっていく。

ディアリン村で竈神の神像が作られ始めたのは今から六十数年前である。フォックティック村やシン村と同じく、はじめは土製支脚オンタオ・ロンとそれをかたどった小型の神像オンタオ・クアンを作っていた。フォックティック村で実用品として生産されていた型を用いた土製支脚は、ディアリン村で生産が始まったときには実用品としてだけでなく、竈神の神体として、すなわちオンタオ・ロンとしても作られていた。

そして、竈神三柱をかたどった新たな小型の神像オンタオ・グオイが一九九四年ムオイ氏の息子ダット氏によってディアリン村で作られた。そのきっかけは、風水を得意とするホー・ヴァン・イェム氏からの依頼であった。その後、ムオイ氏がオンタオ・グオイを生産しなくなるとディアリン村の生産者のあいだでダット氏のオンタオ・グオイを真似て型を作るようになる。それが現在、フエ地域の人びとの家の祭壇で最も多く祀られている神像となっている。

・よりきれいに壊れにくく　生産者のこだわりと思い

シン村から伝わったオンタオ・ロンとオンタオ・クアンはディアリン村の生産者たちのあいだでさまざまな改良がされてきた。改良できることの一つに、神像の型を彫る職人がいるとい

うことがある。ディアリン村はレンガ製造だけでなく棺桶作りも多く行われてきた。それと関連して木工師や彫刻師も多い。神像の型を彫る技術をもった人たちは少なくなく、ヴォー・ヴァン家長男ドック氏の息子やムオイ氏の息子も彫刻を仕事とし、親の神像生産のために型を作っている。

神像の型は各生産者が個々に所有し、交換や貸し借りは基本的にしていない。それぞれに神像に対するこだわりをもって職人や息子に依頼し、型は一つずつ手作業で彫られる。そのため、わずかではあるが生産者の持つ型ごとに神像の違いがみられる。また、ヴォー・ヴァン家長男ドック氏の家ではここ数年大きめのオンタオ・クアンも生産している。この神像を求める人が少なくないことを知り、息子が新たに型を作り生産を始めたのである。四兄弟のなかでもこの型での生産はまだドック氏の家だけである。

神像をよりきれいに仕上げようと特にこだわりをもって試行錯誤してきたのはフン氏である。オンタオ・クアンの三柱の部分を背面で繋げた現在のかたちを考案したのはフン氏であり、現在、ディアリン村のどの生産者も背面がつながったオンタオ・クアンの神像を生産している。フン氏はまた、出来上がった型に自分でも手を加えている。作業の効率をよくしてきれいに仕上げるために型の両側に金属の棒を入れたり、オンタオ・グオイの三人の顔がよりきれいに浮かび上がるように鼻の部分の彫りを工夫したり、なかでも飛び出たヘソはフン氏の神像であることの印となっている。市場で大量に売られた神像のなかでデベソの神像があればフン氏の作ったものとすぐに判断ができる。

六人の生産者はそれぞれ大切に神像を手作業で作っている。手間と労力、体力もいる作業である。特に素地作りでは細かな石などを丁寧に取り除き、なめらかな粘土になるまでネーサットという糸鋸を使い薄切りを繰り返し、腕や足を使い何度も捏ねていく。焼成の際は火が均等にまわり神像が割れないように小さなかけらを一つ一つ丁寧に挟み、並べた層が水平になるよう整えて神像を置いていく。

ここ数年、六人の生産者以外の神像も少しではあるが出回っている。しかし素地作りや焼成の準備にあまり時間をかけていないようで、出来上がった神像は凸凹として触り心地に違いがあり、また簡単に割れてしまう。そのことからも六人の生産者が丁寧な作業をとおして竈神の神像を生産していることがよくわかる。

・生産量の変化と時期

実用品としても使用できるオンタオ・ロンの生産は、現在は

非常に少ない。しかし、フン氏が神像生産を始めた一九八〇年後半、オンタオ・ロンとオンタオ・クアンの生産量は同じくらいであった。それはヴォー家の四兄弟も同じ状況であった。しかし、その後次第にオンタオ・クアンの生産が増えていく。そして一九九〇年後半に三人の竈神をかたどったオンタオ・グオイが作られるようになると、神像生産の主流はこのオンタオ・グオイへと移っていく。これらのことは台所の変遷と関連するため後述する。

2　原料と価格

生産者の話から生産した神像の卸値は、二〇一二年の調査を始めたころから二〇二〇年までほぼ変わっていない。素焼きの神像が一つ三〇〇〜五〇〇ドン（一円五〇銭〜二円五〇銭）、色付けして版画や紙の服を入れてセットにしたものは、漆塗りのオンタオ・クアンとカラフルな色付けのオンタオ・グオイでは違いがあるが、それでも一つ一〇〇〇〜二〇〇〇ドン（五〜一〇円）である。そしてセットで販売するための版画、紙の服、袋は自分たちで購入している。

二〇二〇年は洪水被害で神像の生産が大きく減ったため、この年だけ卸値は倍に上がった。しかし生産量自体が少なかったため彼らの収入が上がることはなかった。

神像の卸値は変わらないが、原料となる土、色付けに使う漆などの価格は年々上がっている。原料である土は、その質も合わせて非常に重要である。以前は村の近くで土が採取できていたが、土の採取が禁止になり、水田の土を購入するようになり、今は水田の土の購入も難しく、山の土などを購入している。

竈神の神像は、毎年見送り儀礼で用いられるため需要はある。しかし、生産者たちが原材料の毎年の値上がりを心配するように価格と原材料費をみれば生産の現状が年々非常に厳しくなっていることは明らかである。

七　フエ地域で祀られる小型の神像

ここでは、フエ地域の人びとがなぜ竈神の祭壇で小型の神像を祀るのか、台所の変化とフエ地域の歴史的背景から考えてみたい。

・台所の変遷

フエ地域では、家によって差はあるが一九八〇年頃まで土製支脚を実際に調理の道具として使用していた。その後、壊れやすい土製支脚に変わり五徳や土製の焜炉などが使用され、ガスコンロが一般の家庭に普及するのは一九九〇年前後からである。

現在でも土製支脚を実際の道具として用いている家もある。また、ガスコンロと併用して五徳や土製の焜炉などを用いている家も少なくない。

土製支脚は地炉に置かれて使用されてきた。その後、そのまま地炉で五徳や土製焜炉を置いて調理をしている家もあるが、多くの家では立って使う台付きの炉が作られ、そこに五徳や土製焜炉が置かれるようになる。そして、その台付きの炉は立って使う台になり、ガスコンロが置かれるようなる。台付きの炉が作られた時期は家によって異なるが、人びとの話を整理するとおそらく一九八〇～一九九〇年頃に多くの家で作られている。

・台所の変遷からみる竈神の神像

現在フエ地域でよくみられる小型の竈神の神像を祀るようになったのは、これまで述べてきたことから明らかなように比較的新しいことである。

フォックティック村では早くから土製支脚とは別にオンタオ・クアンが作られ、祀られていた。しかしフォックティック村以外では、農村でもフエ市内などの都市部でも土製支脚を実用品としていたときは、土製支脚が竈神であり神体であった。また、土製支脚を使用しなくなっても一九八五～一九九〇年くらいまでは、竈神を祀るために地炉に土製支脚を置いて、時々火を入れて温めていた家もあった[15]。ディアリン村で神像生産を始めた頃は、実用品でもある土製支脚オンタオ・ロンが多く作られていた理由のひとつでもある。今もヴォー・ヴァン家の次男と四男の家ではオンタオ・ロンを竈神として祀り、テトや陰暦一日、一四日、三〇日に火を入れてあたためている。今でもそのような家が少ないが残っている。

そして次第に小型の神像を祀る家が増えていく。そこには台所が地炉から台付きの炉に変わったことが非常に大きく影響している。大きくて重いオンタオ・ロンを祀る場所の問題、フエ地域の家々で竈神の祭壇を作り小型の神像を祀ることが広まっていったことなどが理由にある。今ではどの家も、たとえ地炉で土製支脚を調理に使用している家でも壁の高い位置に祭壇が作られている。

また、最初の小型の神像が土製支脚をかたどったものであったことは、人びとが土製支脚から小型の神像へと竈神の神体を移行させることを容易にした要因であろう。今でも年配者の多くは土製支脚をかたどったオンタオ・クアンが本当の竈神の神体であるといい、好んでオンタオ・クアンを祀っている。ホー・ヴァン・イェム氏の竈神も土製支脚をかたどったオンタオ・クアンである。実際に土製支脚を調理に使用していた人たちにとって、「土製支脚が竈神」であるということは大切なの

である。

　では現在、なぜ竈神三柱をかたどったオンタオ・グオイが人気なのであろうか。オンタオ・グオイを神体として祀る人の多くは若い世代である。台所で実際の道具として土製支脚が用いられなくなり三〇年以上が経つ。土製支脚を知らない人たちも増え、若い人たちにとって土製支脚が竈神という意識が薄くなっていることが一つの要因としてあげられる。昔話などで語られるモッバー・ハイオンの三柱の竈神、大晦日のオンタオが登場するテレビの喜劇番組「年末にあいましょう（Gặp nhau cuối năm）」などに親しんできた人たちにとって、擬人化された三人の竈神がより身近な竈神なのだろう。

・小型の神像を祀ることからみるフエ地域の人びとの竈神

　台所の形態が変わり、かつて神体としていた土製支脚は生活のなかからほとんど姿を消してしまった。しかし、年配者も若い人も、台所の形態がガスコンロやIT調理器に変わっても、祭壇には竈神の神体として小型の神像が祀られ、見送り儀礼が続けられている。そのことはフエ地域が有する歴史的な背景と関わると考える。そのため少しフエ地域の歴史を記したい。

　フエ地域のキン族の歴史は、一三〇六年ベトナム陳（チャン）朝の皇女をチャンパ国王に嫁がせた代償として、烏里（ウリク）州（翌年、順化（トゥアンホア）に改名）を陳朝ベトナムに割譲するという出来事により幕をあける。それ以前、フエ地域は長く南海交易の一大中心地であったチャンパ王国の領土であった。

　そして一六世紀以降、北部黎（レー）朝・鄭（チン）氏政権との長い戦争による分断のなかで、フエは広南阮（グエン）氏（一五五八～一七七七）の首都となり、北部ベトナム（ダンゴアイ）、中南部ベトナム（ダンチョン）が出現する。中南部ベトナムは、北部地域の伝統文化を継承・発展させつつ、少数民族、特にフエ地域ではチャム人の文化を包摂し、キリスト教の布教を自由化し新しく多様な文化的特徴を形成し発展していく。

　また、フエ地域は山、河川、沖積平野、デルタ、ラグーン、海と多様な地理的特徴を有する地域であるが、農業や港市として発展できる条件は揃っておらず、その上、厳しい乾季と大洪水を引き起こす台風を伴う雨季、高い湿度などの気候条件はこの地を苦しめてきた。

　そして一九世紀初頭から一九四五年までベトナムの最初にして最後の統一王朝、阮王朝の都がフエに置かれた。フエでは、民間の儀礼は宮廷での儀礼の日時に従い、いつでも人びとは宮廷儀礼より控えめな標準的な儀礼を行うことを心がけていたとフエ地域の民間信仰の研究者チャン・ダイ・ヴィン氏はいう(16)。厳しい地理的条件や先の住人であるチャム人の存在、王都で

あったことなどは人びとのくらしに大きな影響を与えてきた。孤魂や土地の神に対する儀礼には大量の供物が用意され、またフエ地域独自の儀礼がいくつも存在する。[17] それらは厳しい生活環境のもとで人びとが災異をチャンパや土地と結びつく霊魂や孤魂の怒りと考え、災いを回避するために祀り、儀礼を行なってきたことによる。そのなかで人びとは竈神に保護を求めてきた。しかし保護を求める力が強いがゆえに、祀り方を誤り大切に祀らなかった場合には竈神もまた災異をもたらすと考えられてきた。[18]

かつて北部地域で祀られていた竈神とその儀礼は、こうしたフエ地域の歴史的背景のなかで、土製支脚の使用がなくなったあとも竈神の神体を小型の神像に変えて祀り続けてきたと考えられる。そして、小型の神像は祭壇で竈神として祀られるだけではない。もうひとつの役割は、陰暦一二月二三日竈神の新旧交代の儀礼に用いられる祭具としての存在である。竈神の上天儀礼の最後に神像を見送ることで竈神が天に昇り、家族の願いが聞き入れられると信じられている。人びとが新しい一年の保護を求め、祈願するためには竈神の神体が必要なのである。土製支脚を使用しなくなった今、小型の神像は見送り儀礼を継続するための重要な祭具となっている。そしてその重要な神像は木の根元に置かれる。そのことにも大きな意味があると考えられる。

おわりに

フエ地域で創造された竈神の神像について、生産者への聞き取りを中心にその実態を述べてきた。伝統的窯業の村、フォックティック村で創造された小型の竈神の神像は、現在ディアリン村で新たな神像が創造され、生産が続けられている。フエ地域の人びとが竈神への信仰を持ち続け、見送り儀礼が継続されるかぎり、神像は必要な祭具である。

ここで竈神の神体である神像を「モノ」の視点からみることで明らかになった点を以下にまとめたい。まず、神像の形態は、実用品であった土製支脚から小型の神像へ、その小型の神象は土製支脚をかたどったものから擬人化された三柱をかたどった小型の神像へと変化していった。そこには台所と調理道具の形態の変化が関係するが、小型の神像へと変化しても祀り続ける背景にはフエ地域の歴史と人びとの竈神に対する崇拝が関係している。

次に、生産者による神像生産について、それぞれの生産者の実態を述べてきた。どの竈神の神像も生産者による魂を込める工程はない。しかし神像をひとつずつ丁寧にこだわりを持ち手

作業で作り上げる過程や竈神の神像を生産していることへの意識から、それが単なる商品としての「物」ではなく、生産者の思いが込められた「モノ」であることがみえてきた。

今回、神像を祀るフエ地域の人びとについて十分な言及はできなかったが、人びとにとって小型の神像は竈神が宿る大切な神体である。竈神が両儀的な神であるのと同様に、その神像もまた家族を守護すると同時に畏怖の対象ともなりうる。そのことは竈神の上天儀礼で神像を木の根本に置いて見送り儀礼をすることにあらわれている。土で作られた神像を木の根本に置くのは、竈神の災いを封じるため、または回避するためであり、そこにはベトナムの樹木崇拝と陰陽五行説が関係していると考えられる。これについてはさらに調査をすすめ、別の機会で論じたい。

土製支脚が竈神であったとき、その機能は調理道具として支脚の上部に鍋・釜をのせて支え、支脚の間に作られた空間で火を焚くことと、神体として祀ることの二つであった。しかし現在、土製支脚を祀る人びとも実際の調理には使用していない。土製支脚や三柱の竈神をかたどった神像は調理に使用することはできない。すなわちそれは、竈神の依代として祀られ、儀礼で用いられているのみである。竈神の神像を「モノ」の視点からみたとき、それは物理的な機能を伴うものから象徴的な機能へと移行したといえるのではないだろうか。

最後に神像を生産している人びとのことを触れておきたい。ディアリン村で竈神の神像を生産している人たちは、神仏の製作に関わる専門の職人ではなく、また伝統的な窯業の職人でもない。重労働であったレンガ製造から少しは楽にできるだろうとの理由から竈神の神像の生産を始めた人たちである。職業としての一つの選択であった。しかし、彼らはフエ地域の人びとと同様に竈神に対する信仰は厚く、自分がその竈神の神像を生産しているという意識と誇りを持っている。それは丁寧で細かな作業や、きれいに完成させることを心掛けて作り続ける姿にあらわれている。

現在、神像生産の現状は非常に厳しく、調査で訪れるたびに神像の生産で生計をたてることの厳しさが増していることがわかる。そのことから彼らの息子たちは繁忙期に手伝いはするものの仕事を引き継いでいく予定はないという。今後、竈神の神像の生産はどのようになっていくのだろうか、現在の神像に変化がおきたとき、フエ地域の人びとの竈神信仰と見送り儀礼はどのような影響があるのだろうか。可能な限り、神像の生産とフエ地域の人びとの竈神儀礼を見守り続けていきたい。

本稿では民具研究の「モノ」の視点から神像の生産について述べてきたが、今後の課題として国際的な物質文化研究も視野

にいれて、ベトナムの竈神に関する「モノ」を論じていきたいと考えている。

注

（1）鍋田 2014「フエ地域のオンタオをめぐる物質文化」『東南アジア考古学』34号 59-71

（2）土製支脚とは、考古学者小林行雄が命名した用語であり、「炉中に三つ並べ据えて、甕・釜の類を火に懸けるための支え脚」のことをいう［小林 1941：276］。

（3）ベトナム語の訳は "Bồ ông đầu rau cũ đến một chỗ sạch đem đầu rau mới thay vào" とある。「灶」はベトナム語では「ダウザウ」と記されている。土製支脚ことである。ベトナムでは煮炊きに土製支脚が用いられ、一般の家でいわゆる「竈」の使用は普及しなかった。詳しくは鍋田 2021「ベトナムの竈と土製支脚―その形態と機能―」で説明している。

（4）雑誌にはH. V. V. と記載されているが、モーリス・デュランの資料によるとHà Văn Vượngと名前が記されている。［Maurice Durand 1960：138］

（5）この竈神は、"ông táo bếp"「台所のオンタオ」と記されている［Cadiere 2015 tập2：14］。フランス語の原本は "supports de marmite"「鍋の台」である［Cadiere 1918：2］。

（6）竈神の新旧交代の見送り儀礼や各地域の竈神の特徴については、鍋田 2017「ベトナム北部地域のオンタオ儀礼　具象から抽象へ」、鍋田 2020「ベトナムの竈神」で述べている。

（7）フォックティック村の調査は、二〇一二～二〇二〇年にかけて年に一～二回行なってきた。

（8）台付きの炉とは、立って使う台の上に炉が作られているものである。ここではそれを台付きの炉と呼ぶことにする。台付きの炉については鍋田 2021「ベトナムの竈と土製支脚」で紹介している。

（9）五穀壺（cốc ngũ cốc）にはイネ、マメ、もち米、ゴマ、トウモロコシを入れるという。

（10）ディアリン村では棺桶製作も盛んである。ディアリン村において村落共同体の中心を占める主要氏族は「六大族」と呼ばれ、黎族・阮族・陳族・張族・李族・黄族が該当し［岡本 2012：124］、そのうちの陳族の一族の中には葬式用の棺桶などを製作する木工が多く、二〇世紀半ばにおいて、棺桶製作をする家は三〇軒近くありそのほとんどは陳族と黄族であったという［西村 2012b：52］。

（11）日本円への換算は、基本的に調査当時のレートを使用して示している。

（12）シン村の版画については、鍋田 2016「版画に描かれたモティーフとオンタオ儀礼―シン村オンタオ版画を中心に―」で述べている。

（13）サオ（Sào）は地積の単位、北部では三六〇㎡だが、中部では四〇〇㎡である（『詳解ベトナム語辞典』川本邦衛編 2011　大修館書店：1385）。

（14）生産工程、また道具については、鍋田 2014 に載せている。

（15）フエ地域の事例は、鍋田 2015「ベトナムフエ地域のオンタオ崇拝」で述べている。

（16）二〇一三年チャン・ダイ・ヴィン氏のご教示による。

（17）鍋田 2021「ベトナム・フエ地域における陰暦1月9日の新年儀礼」で述べている。

（18）フエ地域の人びとにとって竈神は、家族を守護する神であると同時に災異の神でもある。実際に祀り方を誤ったため災いが起きたという話がある［鍋田　2015：20–22］。

参考文献

【日本語】

岡本弘道
2012「フエ郊外ディアリン村の形成と主要氏族の変遷—収集資料・文書資料および聞き取り調査を通じて—」『フエ地域の歴史と文化—周辺集落と外からの視点』周縁の文化交渉学シリーズ7　関西大学文化交渉学教育研究拠点：123–129

小林行雄
1941「土製支脚」『考古学雑誌』31（5）：276–298

佐野賢治
2002「もの・モノ・物の世界—序にかえて」　印南敏秀 神野善治 佐野賢治 中村ひろ子編『もの・モノ・物の世界—新たな日本文化論』雄山閣：1–7

鍋田尚子
2014「フエ地域のオンタオをめぐる物質文化—オンタオ神像製作と儀礼—」『東南アジア考古学』34号：59–71

鍋田尚子
2015「ベトナム・フエ地域のオンタオ崇拝」『沖縄国際大学地域文化論叢』16号：37–64

鍋田尚子
2016「版画に描かれたモティーフとオンタオ儀礼—シン村オンタオ版画を中心に—」『非文字資料年報』12号：177–197

鍋田尚子
2017「ベトナム北部地域のオンタオ儀礼　具象から抽象へ　—文献資料と調査資料との整理から—」『非文字資料研究』第14号　神奈川大学日本常民文化研究所 非文字資料研究センター：197–224

鍋田尚子
2020「ベトナムの竈神」ハルオ・シラネ編『東アジアの自然観　東アジアの環境と風俗』（東アジア文化講座第四巻）文学通信：335–341

鍋田尚子
2021「ベトナム・フエ地域における陰暦1月9日の新年儀礼」佐野賢治編『現代民俗学考—強度研究から世界常民学へ』春風社：991–1016

鍋田尚子
2021「ベトナムの竈と土製支脚—その形態と機能—」『国際常民文化研究叢書14—民具の機能分析に関する基礎的研究—』神奈川大学　国

際常民文化研究構：313-325

西村昌也
2012a 「フエ都城北郊域の歴史地理学的研究」『フエ地域の歴史と文化—周辺集落と外からの視点』周縁の文化交渉学シリーズ7　関西大学文化交渉学教育研究拠点：15-60

西村昌也
2012b 「ディアリンの土器生産業について」『フエ地域の歴史と文化—周辺集落と外からの視点』周縁の文化交渉学シリーズ7　関西大学文化交渉学教育研究拠点：281-289

【ベトナム語】

Cadière, Léopold（Bản dịch: Đỗ Trinh Huệ）
2015（2010）　Văn hóa tín ngưỡng và thực hành tôn giao người Việt（Trọn bộ 3 tập), Nhà xuất bản Thuận Hóa, Huế

Đoàn Triển
2008（1908）　*An Nam Phong Tục Sách* 安南風俗冊' Nhà xuất bản Hà Nội

Oger, Henri
2009（1909）　*Techinique du peuple Annamite, Mechanics and crafts of the Annamites, Kỹ thuật của người An Nam*, I II III, Nhà xuất bản Thế giỏi

H. V. V.
1948　"Cúng Ông Táo（Ngày 23 tháng chạp âm-lịch)", *Dân Việt Nam*, *Le Peuple Vietnamien*, Nhà xuất bản Viện Đong- Phương Bác-Cổ Edite par L'Ecole Française d' Extrême-Orient, Hà Nội：37-38

Trần Đại Vinh
1995　*Tín ngưỡng dân gian Huế*, Nhà xuất bản Thuận Hóa, Huế

【フランス語】

Cadière, Leopold
1918　*Croyances et Pratiques Religieuses des Annamites dans les Environs de Huế* Bullentin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient, XVIII, No. 7, Hà Nội, 1918：1-60

Durand, Maurice
1960　*Imagerie Populaire Vietnamienne*, Ecole Française D'extrê me-Orient, Paris

Characteristics of Hue in Vietnam from the Perspective of the Statues of the Deity of the Kitchen Furnace: Focusing on interviews with the makers of statues

NABETA Naoko

The small earthen statue of the god enshrined at the altar of the kamado (kitchen furnace) god in the Hue region of Vietnam is placed at the base of a tree or other place after the ceremony of the kamado god is performed at home on December 23 by the lunar calendar, and the send-off ceremony is held again. This statue of the kamado god was created in the Hue region.
This paper clarifies the actual situation and recent transition of statue production, from the point of view of “things” by focusing on interviews from 2012 to 2021 held with 6 families who continue to produce statues by hand in the village of Địa Linh and also held in the traditional ceramic-producing village of Phước Tích. She then uses the lifestyle and historical background of the people of the Hue region to consider the worship of small statues of deities.
Currently, there are three types of deity statues produced in the village of Địa Linh: Ông Táo Lớn, an earthen prop that can actually be used for cooking, Ông Táo Quân, a small deity statue representing that earthen prop, and Ông Táo Người, a small deity statue representing the Three Kamado gods. It has become evident that the Ông Táo Quân, shaped as an earthen prop, was originally made in the village of Phước Tích. Production began in the village of Địa Linh about 60 years ago, during which several improvements were made and a new type of deity statue, Ông Táo Người, was made. It was relatively new in the Hue area to worship small deity statues, the practice dating from the late 1980s, and this is related to changes in the form of kitchens.
And small deity statues have an important role beyond just being placedon an altar. The send-off ceremony for the kamado god, which was once held in the northern region, has been continued by replacing the earthen prop, which was a practical item, with a small statue of the god. Both the historical background of the Hue region, and the wishes of the people living there towards the kamado god are included in this. Looking at the statues worshipped as the embodiment of the deity from the point of view of ‘things,’ the shift from an earthen prop to a small statue can be seen as a shift from using an item with a physical function to one with a symbolic one.
From the interviews with the makers of statues, the harsh current situation of the making of the deity statues and their thoughts on the deity statues are also described.